

# 梶井基次郎研究(1) —「檸檬」「城のある町にて」「ある心の風景」—

越 前 実

## 1. 序 「檸檬」以前—「瀬山の話」

「檸檬」の下敷となった、「瀬山の話」を読むと、梶井の感覚は、非常に鋭く、しかも混乱していることがわかる。

「私の心が膿げにぼやけてくる。— 然しそれが明瞭に自認できる譯ではないが。その證據には、仕事が閑になった感覚器共の悪戯と云はうか、変な妖怪が此のあたりから跳梁しはじめる。」

夜になって、感覚の乱れがはっきりしてくる。昼間は、様々なことに紛れていても、夜になるにつれて、些細なことが気にかかり始める。妙な「妖怪」が出ているような気もしてくる。それれ、肺病によって、引き起こされた病的な精神状態であって、これが、感覚器を異常に働かせ、病人を混乱させてしまうのである。

普通人でも、眠りに入ろうとする時は、感覚は鋭敏になってくる。ましてや、病人は、体力が衰えているだけに、そうした時に、感覚は、普通人以上に生き生きと働くのである。

梶井は、そういった状態で、母の声を聞く。

「不思議にも私は、毎晩極った様に母の声がきこえた。— 略 — 然し、段々私はそれを喜ぶ様になった。怪しくも慕しくもあった。— 略 — 私の耳が錯乱をおこしてゐるのに、私の耳がそれをきかうとあせるのだ。」

梶井の、母親への思慕が現われている。心はいつも動揺しており、体力が衰弱しているが故に、聴覚は、「錯乱」し、母の声が聞こえてくる。そうした時、梶井の精神は、いわば恍惚状態にあると言えよう。

梶井は、夜だけでなく、昼間も、このような状態に襲われる。このような病める精神は、無意識のうちに、懐しい故郷や、母親を、呼びこんでいる。感覚の「錯乱」を利用して、梶井は、故郷との対話を楽しんでいるのである。

その故郷は、一家の働き手でありながら、職につくあてがなく、肺病に犯されている梶井を責めたてるものではなく、過去の健康な時代の思い出なのであった。梶井は、故郷や失った過去への思いを何度も書いている。病める状態から、一時なりとも脱するためには、過去の追想しかなかったのだろうか。

感覚の「錯乱」状態が、常住的になってくると、梶井は、かえって、これを喜ぶようになる。

「そんなことから私は、一つの遊戯を発見した。— 略 — 丸で思いがけない出鱈目が不意に、四辻から現われ、私の行進曲に参加する。又、天から降った様に気まぐれがやって来る — 略 —

私は、その眩惑をよろこんだ。一つは眩惑そのものを、一つは真近な睡眠の豫告として」

「例のもやもやした、気持の混乱を意識し出した最中に、「今だ!!枕をつかんだらうつぶせになり、深い豁谷を覗く様な姿勢をして見る」と自分自身に命じたのだ。奈落の陥ちる気持やならにやら様々な気持を身内に感じたのも、その頃の夜中の事だった。」

梶井の遊戯は、まさに病的である。この「眩惑」に身を任せ、奇怪な空想劇を演ずる梶井は、現実の自分と、想像の自分とが溶解するのを意識するのである。そして、いやが上にも、自分の、不可解な程に動乱している心に、興味を持たざるを得ないのである。「檸檬」の草稿である、この「瀬山の話」は、かなり大部なものだが、「檸檬」,「城のある町にて」,「ある心の風景」などに共通する世界を理解する上で、重要である。つまり、湯ヶ島に転地する以前に執筆された作品には、「瀬山の話」に見られる、感覚の混乱や、それによって発生する不可思議な心的状態が、繰り返し書かれているのである。

## 2. 「檸檬」

梶井は、多くの習作群や草稿を通して、次第に、小説家としての自己を確立していったのだが、かなりの量の未熟な習作は、完成された作品に比べて見劣りはするものの、梶井の内面を多彩に表現していると言ってよい。従って、梶井という作家を理解する上で、これらの資料は、不可欠なものだが、始めて完成された「檸檬」は、こうした習作の域を脱し、明確な作品世界を構築している。

「檸檬」に至る過程で、梶井は、鋭敏な感覚と、その感覚によって生ずる不可思議な心の状態を自覚していく。その感覚は、福永武彦氏が言うように、「属物の事物のなかから、あるひとつを感覚が選びだしたとき、視覚だろうと、聴覚だろうと、その感覚は、特権的な力をあたえられて、平衡のとれた認識をはるかにとおこし、対象にむかって突進していく。」(注1)それ程に鋭いものなので、錯乱状態にあるときはもちろん、平常な状態の時でさえも、心を揺さ振り続けるのである。

「檸檬」で、梶井は、そういう心に、一貫して焦点を当てる。

「えたいの知れない不吉な塊が私の心を圧へつけてゐた。焦燥と云はうか、嫌悪と云はうか——酒を飲んだあとに宿酔があるやうに、酒を毎日飲んでゐると、宿酔に当した時期がやって来る。それが来たのだ。 — 中略 — 何かが私を居堪らずにさせるのだ。それで始終、私は街から街を浮浪し続けていた。」

「檸檬」の冒頭である。宮内豊氏は、「主人公は、えたいの知れないフィクションに悩まされているのではなく、度かさなる飲酒放蕩、放擲した学業、堆積する借金といったまったく現実的かつ具体的な問題に由来する〈不安〉に苦しんでいるのである。」(注2)と、述べている。だが果たして、一人の人間の不安を、このように明確に言い切れるものであろうか。実は、梶井自身、不安の原因を探りかねており、迷い続けているのだ。

ただ、読者に明らかなのは、梶井が、自分の心の不思議さに、心を奪われているということである。

「何故だか、其頃私は、見すばらしくて美しいものへ強くひきつけられたのを覚えてゐる。」

「私はまたあの花火といふ如が好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵の具で、赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき、それから兎花火といふのは、一つづつ輪になって、箱に詰めてある。そんなものが、変に私の心を唆った。」

梶井は街を歩きながら、心をひきつける物を求め続ける。何故魅惑されるのか、その判断は中止したまま、雑多な物に引き寄せられていく。また一方で、京都にいながら、自ら、「京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか — そのやうな市へ今自分が来てゐるのだ」という錯覚を起こそうと努めたりする。それは、「その中に現実の自分自身を見失ふ」ためである。

しかし、これは、あくまで仮り初めの現実逃避である。梶井は、どうしても、「不吉な塊そのものから解放されたかった。その願いは果たされそうになかったが、梶井の前には、一個のレモンが現われる。

「一体私は、あの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたやうなあの単純な色も、それからあの丈の詰った紡錘形の格好も。 — 結局私は、それを一つだけ買ふことにした。それからの私は、何処へどう歩いたのだろうか。私は長い間街を歩いてゐた。始終、私の心を圧へつけてゐた不吉な塊がそれを握った瞬間から、いくらか弛んで来たと見えて、私は街の上で、非常に幸福であった。あんなに執拗かった憂うつが、そんなものの一顆で紛らされる。 — 或ひは不審なことが、逆説的な本当であった。それにしても心といふ奴は、何といふ不可思議な奴だろう。」

レモンを手にして、梶井は、一時なりとも幸福になる。この幸福は、すべての感覚が充足して、始めて得られる感情であった。梶井は、「不吉な塊」から遁れようとしながら、感覚の求めに応ずるがままに、彷徨を続けていたのである。この感覚のもたらす一時的な快樂が、梶井に、心の「不可思議さ」を示してくれたのであった。

山本健吉氏は、「この軽やかな諧謔に満ちた昂奮は、勿論一顆の檸檬の単純な色や形や手触りや重さの中に、彼が常々希っていた心の贅沢を見出した喜びである。そしてそれは、丸善の店で手当たり次第画集を積み上げた上に、檸檬を載せ、何食はぬ顔をして外へ出るという思い付きの実行に依って完成する。これは他愛のない諧謔だと言ってしまえばそれまでである。だが、彼にとって、諧謔とは、韜晦にはかならず、謂わば知的紛飾なのであって、彼の言う「テングウ書き」の裏には、癒し難い現実嫌悪の感情がある。」（注3）と、述べている。

確かに、レモンを画集に載せ、爆発を想像するのは、「諧謔」であり、「現実嫌悪の感情」が隠されている。しかし、こうした無邪気な想像をもたらしたのは、他ならぬ不可思議な心の動きなのである。梶井は、この「檸檬」で、簡単に変容してしまう心の不思議さを、執拗に追って

いる。梶井の心は、鋭い感覚によって束縛されており、変転きわまりないが、それだけに梶井は、そうした心を、好奇の対象として捕え離さなかったのである。

### 3. 「城のある町にて」

「城のある町にて」でも、「檸檬」と同じように、梶井は、心の不可思議な動きに注目している。そしてまた、「檸檬」で、貧しい街並や、花火や、少しも立派ではない果物屋に魅せられたように、「何処を取り立てて特別心を惹くやうなところ」がない風景に心を奪われているのだ。

この風景のどこに魅力を感じているのか。梶井は、この「城のある町にて」では、珍らしく追求し続ける。それ程、この風景が、印象深かったのであろう。

「なにかある。本当になにかがそこにある。と云ってその気持を口に出せばもう空ぞらしいものになってしまう。

例えば、それを故のない淡い憧憬と云った風の気持、と名づけて見ようか。誰かがそうじゃないかと尋ねて呉れたとすれば、彼はその名づけ方に賛成したかも知れない。然し、自分では、「まだなにか」といふ気持がする。

人種の異なった人びとが住んでいて、此の世と離れた生活を営んでゐる。 — そんなやうな所にも思へる。とはいへ、それはあまりお伽話めかした、ぴったりしないところがある。なにか外国の画で、彼処に似た所が描いてあった。が思い出せない為ではないかとも思つて見る。それにはコンスティブルの画を一枚思ひ出してゐる。やはりそれでもない。

では一体何だろうか。このパノラマ風の眺めは、何に限らず、一種の美しさを添へるものである。然し入江の眺めは、それに過ぎてゐた。そこに限って、気韻が生動してゐる。そんな風に思へた。」

結局、「気韻の生動してゐる」という表現で、追求は終わってしまうが、梶井にとって、心が揺れ動く原因を探ろうとする姿勢は、殆ど生得的と言ってもよい位である。納得の行くまで、あくまでこだわり続ける行為は、拘泥と呼んでもよいであろう。

この性質を自覚していたことを、梶井自身、書簡で述べている。「とにかく拘泥は、おれの畑で、この一生を他の人々よりは、ずっと苦しく生活してゆかねばならないのが、自分の運命らしい。然し段々、これを浄化してゆける様な気がしてゐるのだが — 」(大正12年5月10日・宇賀康宛) 拘泥を、「自分の運命」と考える位、梶井は、嫌悪感を抱きつつ、こうした性質を自認しているのである。

この拘泥の自覚は、小説家としての自己を認識することでもあった。栗津則雄氏は、「城のある町にて」のスケッチを書く一年前程の時期に、「おのれの個性の本質的な形を全体的につかみとり、そのような個性の宿命とも言うべきものに自覚的に身を委ねたと考えていいようだ。」

(注4)と、書いている。未熟な習作群から、「檸檬」「城のある町にて」のような作品に至るには、そうした個性の運命的な自覚が必要だったのである。

拘泥がフェイタルなものだと決めつけてしまえば、拘泥する自己を、客観視する態度も生まれてくるだろう。梶井にとって、物にこだわる自己は、魅力的な観察の対象なのである。特に、感覚が鋭敏になり、心が不可解な程に動き始める時、梶井は、かえって逆に、冷静に、客観的に心理状態を把握できるようである。「城のある町にて」における次の箇所は、そのことをよく示している。

「夜は、静かに寝られないでゐると、室を五位が啼いて通った。ふとすると、その声が、自身の身体の何処かでしてゐるやうに思われることがある。虫の啼く声なども変に部屋の中でのやうに聞える。」はあ来るな」と思つてゐると、えたいの知れない気持が起こつて来る。

変な気持は、電灯を消し眼をつぶつてゐる彼の眼の前へ物が盛に運動する気配を感じさせた。庞大なものの気配が見るうちに裏切つて微塵になる。確かどこかで触つたことのあるやうな、口へ含んだことのあるやうな運動である。廻転機のやうに絶えず廻つてゐるやうで寝てゐる自分の足の先あたりを想像すれば、途方もなく遠方にあるやうな気持に直ぐそれが捲き込まれてしまふ。」

梶井は、幻惑状態にある心を、冷徹なまでに醒めた目で観察している。この第三者的な目を持っていることが、梶井を優れたリアリストにしている訳だが、それにしても、普通人には到底持ち得ない精神構造である。福永武彦氏は、「梶井は、本質的に楽天的で健康である」（注5）と言っているが、こう断定できるだろうか。むしろ、遥かに病的な精神の持主だと言えよう。

引用にあるように、「えたいの知れない気持」や物が目の前で運動するような「変な気持」が、恐怖感を伴つて起こってくる時、梶井は決して、その気持の中に埋没してしまわない。むしろ、強靱とも言える精神力によって、そうした気持に漂よう自己を、漂ようままに見据えているのである。

「えたいの知れない気持」は、「瀬山の話」でも描かれたが、小品「泥濘」では、「そんなことがなくてさへ昼頃迄夢をたくさん見ながら寝ている自分には、見た夢と現実とが時どき分明しなくなる悪く疲れた午後の日中があった。自分は何時か、自分の経験してゐる世界を怪しいと感じる瞬間を持つやうになつて行つた。」と、あるやうに、夜、寝つかれずに、感覚の惑乱によつて起こされた気持の混乱状態が、やがて、白日の下でも繰り返されるようになる。こうなると、梶井は、もはや、自分の生息している世界全体が信じられなくなってくる。

こうした錯綜した世界が現実であつた梶井には、過去の健康であつた頃の世界が慕わしい。

「それ等はなにかその頃の憧憬の対象でもあつた。単純で平明で健康な世界。今その世界が彼の前にある。思ひもかけず、こんな田舎の緑樹の蔭に、その世界はもっと新鮮な形を具えて存在している。

そんな国定教科書風な感傷のなかに、彼は彼の営むべき生活が指唆されたやうな気がした。

食つてしまひ度くなるやうな風景に対する愛着と、幼い時の回顧や、新しい生活の想像とで、彼の時どきの瞬間が燃えた。」

過去への思慕は、「城のある町にて」だけでなく、梶井の作品の至る所に現われる。現実の生

活が、病気や不摂生によって荒廃してしまつて時、過去の満たされた生活が、思い返されるのは、人の常なのだろうか。過去の感傷に浸っている梶井の姿は、妙に似つかわしい。

伝記を読むと、梶井の幼年時代は、必ずしも幸福ではない。しかし、現在の梶井にとって、過去は、「憧憬の対象」であつて、「単純で平明で健康な世界」だったのである。しかもそれが、「国定教科書風」であるところに、梶井の人間性が現われている。

梶井は、倫理性を重んじる人間であつた。それだけに、現在の自分が、落伍者としての烙印を押された人物に思えるのである。「檸檬」の中に、「あるびいどろの味程幽かな深い味があるものか。私は、幼い時、よくそれを口に入れては、父母に叱られたものだが、その幼時の、あまい記憶が大きくなって落魄れた私に蘇ってくる故だろうか。全くあの味には幽かな かな何となく詩美と云つたやうな味覚が漂つて来る。」という箇所があるが、梶井は、自己を「落魄れた」人間と規定すると同時に、自分自身の内部で、両親に叫ばれたという「あまい記憶」が、びいどろによって喚起されるのを、切ない気持ちで感じ取らざるを得なかつたのである。このびいどろも、黄色のレモンと同様に、心の贅沢を与えてくれたものだっただろう。梶井の感覚を満足させた数々のたわいない物は、梶井を、幸福だった過去へと導いていくが、ここから、現実逃避をしようとする、過去への回帰願望だけを読み取るとしたら、不十分である。

「橡の花」という小品の一節に、過去への思慕が、梶井の芸術観に詰むところがある。倦み疲れている男に、雨の音が聞こえてくる。その音は、感覚が混乱している男には、音楽のように響く。しかも、耐え難い音楽である。男は、別な音を作ろうと試みる。さらさらとペンを走らせ、やがてそれは、決まったリズムを刻み、何か新しいリズムへと変貌する。そして、全神経を集中して、その音から、言葉を聞きとろうとする。その時、心は純粹さを持って、過去と対峙している。過去とは、遠ざかっていた故郷なのである。そうした一連の行為の中に、芸術における真実を見い出していく。

この小品の注釈として読めそうなのが、次の書簡である。「ほんとうの苦悶のなかにあつて、詩など生れて来やあしないだろう。それは、客観的には苦悶でありながら、主観的には、ただ焼糞のような憂うつ、病気に似た疲労であるに過ぎなく思われる詩に充たされてゐるからだ。然し、ほんのわずかの拍子に、例えば、階下から線香の匂ひでもして来たときとか、雀が煙突の巢へはいったのを見たとかした拍子に、君の苦しみも閃光のやうな表出を得るかも知れぬ。そのときはどうか命を傾けて詩を書いてくれるやうに」（昭和3年2月2日・北川冬彦宛）

梶井の芸術観が窺える書簡だが、詩人の北川冬彦を鼓舞する言葉は、そのまま、梶井自身へと向かっているだろう。梶井は詩こそ余り書いていないが、資質的には、詩人なのである。つまり、湯ヶ島以前の作品を読むと、たいてい、「苦悶」のなかにあつて、「閃光のやうな表出」を得る主人公のみが描かれ、当然の如く、散文詩のように短くまとまっているのである。梶井は、「苦悶」から一瞬なりとも脱け出して解放される時、故郷と触れ合う機会が生まれ、救済される時間を持つことができたのである。

#### 4. 「ある心の風景」

「ある心の風景」もまた、湯ヶ島以前の小説に、共通の特徴を持っている。即ち、感覚的な惑乱が、不幸の始まりなのである。

「喬は度たびその不幸な夜のことを思ひ出した。――彼は酔った客や、嫖客を呼びとめる女の声の聞こえて来る、往来に面した部屋に一人坐ってゐた。勢ひづいた三味線や太鼓の音が近所から、彼の一人の心に響いて来た。

「この空気」と喬は思ひ、耳を敬せるのであった。ゾロゾロと履物の音。間を縫って、利休が鳴ってゐる。物音はみな、惑るもののために鳴ってゐるやうに思へた。アイスクリーム屋の声も、歌をうたふ声も、なにからなにまで。

小婢の利休の音も、直ぐ表ての四条通では、こんな風に響かなかった。喬は、四条通りを歩いてゐた何分か前の自分――其処では、自由に物を考へてゐた自分――と同じ自分をこの部屋のなかで感じてゐた。

「たうとうやって来た。」と思った。」

感覚が引き起こす心の不可思議は、娼家に上がった際にも訪れる。梶井は、このような心の状態が訪れるのに、期待感さえ持っているようである。ここでは、履物の音と利休の音、アイスクリーム屋の声や、うたう声や辺りのすべての物音が、何物かの為に、融合して鳴り始める。すると、梶井は、その幻聴に悩まされる自己を嫌うのではなく、かえって、「耳を敬せる」ことによって、幻聴の中に身を委ねようとするのである。

梶井は、単に幻惑状態で、漂っている存在ではない。むしろ、常住的な幻惑状態のなかで、対象に向かい、何ものかを捕えようとする志向性を持っている。それは、例えば、主人公が、やはり家で、「平常、自分が女、女と想ってゐる。そしてこのやうな場所へ来て女を買ふが、女、女と想ってゐる。そしてこのやうな場所へ来て女を買ふが、女が部屋へ入って来る。それまではまだいい。女が着物を脱ぐ、それまでもまだいい、それからそれ以上は、何が平常から想ってゐた女だろう。「さ、これが女の腕だ」と自分自身で確かめる。然しそれはまさしく女の腕であって、それだけだ。そして女が帰り支度をはじめた今頃、それはまた女の姿をあらはしてくるのだ。」と述懐する場面があるが、対象の実体をつかもうとする姿勢は、「ある心の風景」で、特に著しい。

佐々木基一氏は、「このような激しい渴望と、このような探求慾が、作者に幸福をもたらすものでないことは、明らかだ。神秘のヴェールを一枚めくればまた、その奥に秘密があるといった具合で、それを一枚づつはがしてゆくにつれて、外界はますます謎をふかめてゆくのである。こうして、果てしない追いかけっこがはじまる。そして作者は、自らの渴望の激しさかられて自ら疲労困憊の極に達する。」（注7）と、述べていて、梶井の探求のエネルギーを照射している。しかし、これだけでは不十分で、栗津則雄氏は、「「平常から想ってゐた女」と、自分が眺め触れるにつれて、刻々に変容する女とのあいだの乖離という微妙な主題」（注7）を扱ってい

ると指摘している。

梶井の、対象への志向性と、対象と解離するという関係は、この作品における「凝視」に最も典型的に表われている。

「喬は、ただ凝視ってる。 — 暗のなかに灰白く浮んだ家の額は、さうした彼の視野のなかで、消えてゆき現われて来、喬は心の裡に、定かならぬ、想念の亦過ぎてゆくのを感じた。蟋蟀が鳴いていた。そのあたりから — と思はれた — 微かな植物の朽ちてゆく匂ひが漂って来た。

— 中略 —

彼の視野のなかで消散したり、凝集したりしてゐた風景は、或る瞬間、それが実に親しい風景だったかのやうに、また或る瞬間は全く未知な風景のやうに見えはじめる。そして或る瞬間が過ぎた。 — 喬はもうどこまでが彼の想念であり、どこからが深夜の町であるのか、わからなかった。暗のなかの夾竹桃は、そのまま彼の憂うつであった。物陰の電燈に写し出されている土堀、暗と一つになってゐるその陰影の観念も亦其処で立体的な形をとってゐた。

喬は、彼の心の風景を其処に指呼することが出来ると思った。」

「ある心の風景」ほど、観念が全く外物と一体化してしまった描写があるのは、梶井の作品の中でも稀である。梶井の作品は、多かれ少なかれ、このテーマを扱っているが、題名が示すやうな、心の風景を精彩に描いたのは、見当たらない。

「城のある町にて」には、「葉や虫や風景を眼の前へ据えて、秘かに抑えて来た心を燃えさせる。 — ただそのことだけが仕甲斐のあることのやうに思へた。」とあるが、対象への没入感には程遠い。

喬という主人公は、窓から外を「凝視」する。この「凝視」は、単に外物の動きや姿を視るのではない。「想念」を内から外へと運び出すのである。「凝視」しているうちに、次第に、感覚は乱れてきて、物は揺れ動き、消えたり、現われたりして、ある「瞬間」を経て、「想念」と「深夜の町」とが一体化する。そこでは、「想念」あるいは「観念」が「立体的な形」を取っているのである。

「凝視」は、「観照」と言いかえてもよいであろう。稲垣達郎氏は、梶井の書簡の中で、馬蠅が、蠅であることを脱して、憎むべき観念になるというところを引用して、「彼はひとつの対象を観念化して受取ることをする。対象に何らかの心懷を感じずるばかりではない。観照が一定の点へ達すると、対象から観念が抽象化され、多くは対象と同化してしまふ。」（注8）といっている。

梶井のこうした特性は、生得的なものかもしれないが、病んだ肉体によって、観念が肥大していく傾向も見逃せないだろう。これを、近代人の病いであるといふ言葉でにぞしたくないが、まさしく病める状態であることは、間違いない。

井上良雄氏は、「近代人にあつては、観察とは、常に飽くことのない自己意識を意味した。不安と焦燥がいつもそこから生まれて来る。併し梶井にとっては、見るとは常に完全な自己喪失で



ある。意識は、対象の中へ吸い取られてしまふ。自分が死んで、対象が生きている。」と述べ、その対象である風景について、「恐らく原始人だけが、この様な風景を知ってゐた。石の中にも、樹の中にも、己の中と同じ様に、蠢いている精霊を感じて、それと闘ひ、怖れ、火を焚いて祈った、あの原始人だけが、この様な感覚の初発生を持ってゐた。」（注9）と、結論づける。

けれども、梶井は、決して原始人のような存在ではなく、まさに、病める近代人であって、安東次男氏が言う、近代の倦怠に犯された人々の持つ、「物質の不可侵性を無視する」（注10）態度を持っているのである。また、梶井という主体は喪失しており、井上氏の言う「自分が死んで、対象が生きて来る」という表現よりも、梶井自身が、井上良雄の評に共鳴して、自ら書簡で述べた、「対象のなかへ自己を再生さす」という表現の方が、正鵠を射ているだろう。

病んだ自己は、その心のはけ口を求めて、対象へと突入して行き、観念が対象に充溢した時、始めて動きをとめる。そこでは、落ちつきと静謐が支配しており、憂うつが、「ある距り」をもって眺められるのである。その時やっと、梶井は、自己を取り戻す。そうした一連の動きは、神秘的と言ってもよい。だからこそ、梶井は、自己の動乱する心を、どうしても言表したかった。しかし、神秘的な心の様相を言語化することは難しい。梶井は、「心の裡のなにか」としか言えないし、「視ることそれはもうなにかなのだ」と言い、「自分の魂の一部分或いは、全部がそれに乗り移ることなのだ。」と言ってはみるが、この対象との不可思議な合体を、十分に言い尽くせない思いをしているだろう。

ただ、梶井にとって、確実なのは、「ある距り」を置くことのできる心が、平穏さを取り戻し、憂うつから解き放たれているということである。つまり、小品「泥濘」で、「何をする気にもならない自分は、よくぼんやり鏡や薔薇の描いてある陶器の水差に見入ってゐた。心の休み場所——とは感じないまでも、何か心の休まってゐる瞬間を、そこに見出すことがあった。」と書いているように、「心の休まっている瞬間」が、そこには存在するのである。梶井にとって、殆ど唯一の休息と呼べる時間は、対象に入り込んでいて、対象と一如になってしまう、ほんの短い時間だったのである。

#### 【注】

- (1) 福永武彦 「梶井基次郎 その主題と位置」（『中島敦・梶井基次郎・近代文学鑑賞講座18』角川書店刊 昭和34年12月）
- (2) 宮内豊 「檸檬と爆弾」（『文芸読本 梶井基次郎』 河出書房新社刊 昭和52年4月）——以下『文芸読本』と略す
- (3) 山本健吉 「梶井基次郎」（『文芸読本』）
- (4) 栗津則雄 「想像の構造」（『文芸読本』）
- (5) 福永武彦 前掲論文
- (6) 佐々木基一 「梶井基次郎」（岩波文庫 『檸檬・冬の日』 昭和29年4月）

- (7) 栗津則雄 前掲論文
- (8) 稲垣達郎 「梶井基次郎」 (『日本文学研究資料叢書・梶井基次郎・中島敦』 有精堂刊  
昭和53年2月)
- (9) 井上良雄 「新刊檸檬」 (『井上良雄評論集』 国文社刊 昭和46年11月)
- (10) 安東次男 「幻視者の文学」 (『文芸読本』)